

飛耳長目

通巻189号 令和元年8月1日発行

「開頭」第74号巻頭言

芦田先生の三周忌を迎えて

森 信三

芦田恵之助先生を失った嘆きは、ついこの間のことのようにも思われるが、今歳末をもつてすでに三周忌を迎え、今さらのごとくに歳月の匆忙（そうぼう）の感に堪えない。今こそ我ら先生とのゆかりの深き同志は、いかなる途を歩むことが、果たして真に先生の精神を今後にかすゆえんかについて、改めて深思すべき時期である。この点については巻頭論文において一応のことを述べたが、しかし紙面の都合上一般論にとどまったことは、我ながら遺憾である。よってここに具体的結論を要約して言えば、国語教授としては、「芦田……国分ライン」を躬を以て拓くことであり、また教育全体の立場としては、まさに「民族教育の定礎」という大事業に挺身することである。前者すなわち「芦田……国分ライン」の打開とは、そのかみ随意選題の提唱者たりし人の生命は、今や生活綴り方によって、民族の危機に躬を以て当たりつつある人々の生命に連なる一路を拓かねばならぬという事である。すなわちそこには「個の自覚」から「社会的解放」への展開が行われねばならぬが、その具体的方途についてはもとよりここに詳述できる

事柄ではない。これ我らが「冬季研修会」を特に先生臨終の地丹波竹田の法楽寺を選んで開かんとする所以である。

（「開頭」74号12月号 昭和18年12月5日発行）

生命の継承と展開

西先生および芦田先生を憶うて

森 信三

1 今年の秋から初冬にかけては、私にとって近来にない意味深い季節であった。それは10月上旬から中旬にかけて、初めて「旅」と名付けても良い「東北の旅」に出で立ったことを別にしても、他に二つの特記すべき事柄がある。

その一つは去る11月の13日は故西晋一郎先生の十周忌に該当するのでその記念事業の一つとして、広島と鳥取とで、それぞれ記念講演会が催されたということである。今一つは、この12月9日は誌友諸氏もご存じのように、芦田恵之助先生の三周忌に当たるので、別項記載のように、今年には特に先生のご臨終の地丹波竹田の法楽寺で、追悼会を催しがてら、「講習会」と「教壇研修会」とを催そうと思ふのである。

西先生と芦田先生とは、私の生涯において最も深い生命の関連を持った方であり、しかもこの二人の方が、一方は10周年忌他方は三年忌という、それぞれ記念されるべき年の巡り合わせになったとい

う事は、私としてもひとしおに感慨が深く、それ故ここに「生命の継承及び展開」というような問題について、多少の感慨を述べてみようという気持ちになった次第である。

2 そもそも一人の卓越した人物の没後は、必ずやその継承に関して問題の現れるのを常とする。而してこれを換言すれば、外形形式の継承を専らとする保守守旧の側に立つ人々と、旧形骸を打破してその生命を新たな形骸において展開せんとする人々とに分かれるのを常する。今は事の煩わしさ故に、それをキリストとか、釈迦とか乃至はわが国における親鸞、日蓮のような史上に著名な人々について、その事の実証を試みることは差し控えるが、しかも私が上に概括的に述べた事柄は、いわば生命継承の原則とも言い得るほどに、ほとんど例外なく当てはまると言って良いと思う。

2 とところで問題は、「では一体それら二つの立場のうち、どちらかが果たして真実であるか」ということであるが、言うまでもなくそれは後者であって、すなわち先人の旧形骸を破碎して、一新形態を創造するところにこそ真に「生命継承」の秘義はあるというべきであろう。しかもそれには①旧形骸を破碎する力と、②新

たなる形骸を創造する力とが、同時に要請されることを知らねばなるまい。

このような生命の展開を最も明瞭に示すものの一つとして、我々はカントからフイフテ、およびシェリングを経て、ヘーゲルに至った生命の展開様式を挙げる事ができるであろう。しかしこのようなことを言うのに対して、「だがそれは単に哲学上のことではないか」という人があるかとも思うが、しかしこうした「生命継承の真理」はまたキリスト教の上にも見られ、さらには仏教の嗣法の伝統の上にも実証できることである。否、一個人の生命すら厳密には二度と同じ日はないのに、まして人を異にする場合、「生命の継承」が単なる先人の言説の蒸し返しの程度に留まるという事は、真に生命を継承する所以でない事は言うまでもない。否、もつとも厳密な立場から言えば、生命にはいわゆる、伝承というような事はありえないとも言えるであろう。けだし生命とは厳密にはそれぞれに全一的「個」なるが故である。かくして「生命の伝承」と考えられるものは、実は卓れたる先人の生命力に触発せられて、自らもまたその先人の生きたように、「自らの生命に徹して生きる」ことの外ないであろう。しかもそこには生命触発の機として偉大なる先人の生命が要とせられるところに「伝承」と考えられる一面も存するわけである。

3 しかもこの自明事とも言うべき真理が、一人の偉れた人格の没後当分の間は、関係者の間において、ともすれば混乱し不分明に陥りやすいのはそもそも何故であろうか。

3 その一つは、我こそは亡き先人の道を継承している……という人間に通有な自負の心であろう。そこには自負とともに、ひそかなる自己満足を伴うを常とする。しかも時としては、単にそれだけに留まらないで、そこに打算の心さえ潜み得る場合さえ少くなしとしないであろう。

西田幾多郎先生の没後いわゆる側近の人々によって、先生に関する幾多の書物が著わされたが、しかし西田先生の思想を真に内からこれを斬ってこれを超克しようとした人あるを見ない。（柳田謙十郎氏のマルキシズムへの転換も、ある意味では西田哲学の超克と言えないことはなだと思いが、ここには紙面の都合上、立ち入ることを差し控える）

だがこの場合田辺先生だけは例外である。何となれば田辺先生の西田哲学に対する内的超克のご努力は、遠くすでに西田先生の生前に発しており、そのことは肉の西田先生をして、すでに常に心を遣わせ、感情的には不快ならしめていたらしいからである。

このことを例証する話として、晩年の

西田先生は、その座談の席上、いわゆる側近の人々に取り囲まれている時は、頗るご機嫌がよく、談論風発の趣があつたが、一座の中に田辺先生が一枚加わつていられると、苦虫を噛み潰したように苦り切つていられることが多かつたという。またその著書の序文に「日本の学会はどうも自分の考えを受け入れてくれぬようだが……」という意味の文字がしばしば見受けられたが、あれ程まで、学会に支配的でありながら、どうしてこのようなことを言われるのか分からず、不思議で、これも謙虚の言葉と解していたある人が、いつかその事に触れて、西田先生に尋ねたところ、「いや、田辺のヤツがいつも噛みつきおつて……」と答えられたということである。

4 去る11月中旬、広島と鳥取の二カ所

行われた西先生の10周年記念の講演会でも、そこで講演した人々は、西先生の思想を、敗戦という未曾有の歴史的悲劇を通過して、いかに現在に新生せしめ得るかに心を砕いている人々ではなかつたようである。先生のように、民族とその歩みを共にせられた思想家の場合には、今回の敗戦はまったく文字通り「最深の悲劇」と言わねばならぬ。それ故私は先生が戦後の今日まで生きておいでにならないうことに対して、却つて先生のためにお幸せだつたと考えているのである。もつともこのようなことが、直接血につながるご遺族の方々には申し上げられる事柄ではないけれど、さればこのような先生の悲劇の深さに対して、何らの感覚をも持たない立場から、果たして真に先生の生命について語りうるものであろうか。

また直接先生の弟子ではないけれど、身分的には先生とも関係の最も深かつたさる人の書かれたものうちにも「今日の世相の混乱を思う時、いつも西先生のご存命だつたと思わぬことはない」という意味のことを見たことがあるが、仮に今日西先生がご存命だつたとしても、80を越えた先生に、果たして今日のこの激流のような時代を照らす光を期待し得るであろうか。私にはこうした言葉は時代を知らず、先生を知らず、やがてはまた自己自身をも知らざるの言というほかない感がして、先生亡き後の先生の周囲に

対して、そぞろに感慨をそそられた次第である。

5 翻つて芦田先生の没後満二年の現状はいかがであらうか。先生の精神を真に今日に生かすとは、果たしていかなることであらうか。

そもそも一人の卓れたる師の弟子になるといふことは、師の精神によつて、それ以前の自己が斬られて、そこに初めて真の自己が生誕するということではなればならぬ。だが師の道を嗣ぐという事は、それとは違う。それには何よりもまず師の肉体のこの地上よりの消滅を機として、師の教説の形骸を斬るでなければならぬ。もつとも田辺先生は前述のように、西田先生の生前すでにこれを敢行していられたのであり、私はそこに「西洋的なるもの」を看破して、自らを顧みて感激を深くせざるを得ない。

だがこの場合、最も深く注意を要する点は、師の教説の形骸を斬る事は、実はそれまでの自己……即ち師の生きていた間の自己をも斬ることだけではなからぬ。また、はもちらん同一ではあるが、そこに斬られるものもまた本質的には一つでなければならぬであらう。

かくして師の没後、師の教説の形骸を斬る者は、何よりもまず自己自身を斬ることが要とせられる。

しかもこのような事は、時代がそれほど激変しない時代にあっても、なおかつそうであった。現に西田先生に対する田辺先生の斬り込みは、前述のように戦前のことに属する。況んや民族の歴史そのものが切断されたとも言えるほどの絶大なる悲劇的敗戦を通過した今日においておやである。

この場合注意を要する点は、なるほど芦田先生のなくなれたのは、戦後6年を経過した昭和26年の歳末であるが、しかし静坐と禅とを主とされた先生の世界観人生観は、厳密には「戦前的なるもの」というほかないであろう。けだし如何に偉れたる魂といえども、時代を超えて生きることは不可能だからである。このことは前述のとえ西先生が、今日にご存命であったとしても、もはや今日のこの激しい時代に生きる指針を先生から仰ぎ得ないというのと同一である。

もつとも厳密に言えば専ら「個」の自覚に生きられた芦田先生と、「国」の自覚を主として生きられた西先生との間には、その間多少の相違がないわけではない。この点からは芦田先生の御精神の方が、なお今日の時代への連続性をもたれる点が多いというべきであろう。

だがそれにもかかわらず時代は、単に自足自全「東洋的個」に留まることが許されず、個は自らを内面的に斬って「社会への解放」を敢行すべきことを要請し

つつあるのである。されば縁あつて芦田先生の自覚に触発せられて、戦前まで「個」の道を主として行つてきた人々は、この激流の如き時代において、先生の道を継承せんとするにはいかなる道を歩むべきであろうか。方向的示唆は以上を以てほば事足りるのではあるまいか。

かくして早結論を言わねばならぬ時がきた。それは、師の形骸を斬り得る者にして、初めて師の生命を継承することができる。しかも師の形骸を斬るには、何よりもまず自己そのものを斬らねばならぬ。ということである。

而して自己を斬り、師の形骸を斬る利刃は、今日においては、時代の背負うその歴史の意義の認識の外になく、而してこれを照明する最も有力なる思想の一つが、マルキシズムであることは、今日何人も異論なき処であろう。

試みに師の形骸を固守する人々に向かつて、「二体あなたは、それほどまでに尊敬せられる先生の思想を、今日の若い人々に伝える自信がおりますか」と尋ねるとしたら、私の言おうとしている問題の焦点は最明瞭となる。師の道を真に敬重する者は何よりもこれを、若き人々に伝えるでなければならぬ。けだしここにこそ生命伝承の真義はあるからである。もしそれができないで「どうも今日の若い連中は……」などと嘯いて恬然たる人

々があるとしたら、たとえ自分では、師の道を継承していると思つていても、実は師の生命の若き世代への流入を自ら阻止しているものに他ならない。

だがすべては現実の歴史が実証する。冷厳なる歴史の法則の前には、一切の雲霧はやがて消滅する秋（とき）が来るであろう。

（「開頭」昭和28年12月5日発行第74号）

あとがきに替えて

今号は森信三先生の求道の精神が披瀝されている貴重な文献であると思う。「厳しい！」という感懐が強く残った。何度も読んでみて、とても「生命の継承」等は普通の人間の覚悟では到底難しい一事であることを改めて考えた。学問の世界のみの話でもないであろう。すべてSCRAP & BUILD AND GOの精神とも言えるかも知れぬが、「破碎」とか「超克」とかまあ、常人には別世界の言辞でもあろうか。さすが多くの先哲の生き様を学んだ森信三先生だからの到達点なのだろう。

（30日二繁）

〒633-0003

桜井市朝倉台東2-538-189

電話 0744-4513422

Email: h33@ken.jp

http://web1.ken.jp/syushn